



終わらない。若い頃、『板の心を  
知れ』って先輩に言われた言葉  
が、まだ頭に引かかっているん  
ですよ。最近、ようやくわかってき  
た気がしたんだけど、叩くと思  
いもよらないと『さ』にゆがみが  
出たりしてね。まだまだですわ」

「教えられるのは基本だけ。あと  
は本人次第です。メーカーは量  
産が前提だから、手作業で全部  
を作る必要はない。でも、技術  
を身につけた人間が機械を操作  
するのとそつでないのとは、  
品質や効率が全然違うんです。  
喜んで乗ってもらえる車を作る  
には、手加工の技術を持ち、そ  
れを発展させられる技能者が

必要なんですよ」  
板金は、難しい」とも、大変だ  
とも、青木さんは言わない。た  
だ、奥が深い」とほほえむ。  
「板金はずっと挑戦目標であり、  
進む方向を示す指標でした。  
まあ、人生そのものですね」  
職人とは、生涯を傾けられる  
分野を見つけた、幸福な人々を  
指す言葉なのかもしれない。



### 青木 佑

昭和17年生まれ。高校卒業後、  
富士重工業群馬製作所に入社。  
硬式野球部の選手として、昭  
和44年には全国都市対抗野球  
全国準優勝に貢献。野球選  
手時代の経験が今も私の支え  
とご本人。その後は板金一筋で  
開発車の製作に取り組み、スハ  
ル1000ほか数々の名車を送  
り出す。昭和50年、一級板金技  
能士。平成12年度、現代の「匠」  
に選ばれる。

PROVISION

# 職人の技

シリーズ 自動車板金技術者

ひとつの技術がひとりの人間の血となり肉となるには、

たいどれだけの時間と集中が必要なのだろう。それを知るために、名工と呼ばれる人々を訪ねていこうと思う。

「設計者があれこれ考え、研究と技術を注いで描きあげた設計図を、忠実に形にする。それが我々板金技能者の仕事です。」

それだけのことで、とても言いたげな青木さんは、板金ひとすじ約40年。量産前の試作車を、これまで100台以上も手がけてきた。現代の名工だ。

「自動車は約250点ほどの部品でできていて、そのひとつひとつにちゃんと役割があるんです。だから板金と同じく、何でもやたらとひっぱればいけないものではない。設計者の意図を図面から読みとり、部品の役割を考え、作るものの形状を頭に叩き込むことから、私たちの仕事は始まり

ます。」

平面・正面・側面、3方向の図面から立体的な形状を読みとり、展開図を描き、必要な板の大きさを決定する。読図と呼ばれるこの作業を、新人はイヤというほど訓練する。単品の図面を確実に展開できるまでに2〜3年、複数の部品が組み合わさったアッシ図が読めるまでには4〜5年かかるそうだ。

「それから板の切り方、リマーの持ち方、溶接も覚える。まあいちばんは叩き方ですね。板金というものは、要は板に衝撃を与えてひずみを作って変形させていくわけです。そこをどれくらい力であらう叩くと、板はどのくらい変化するのかが、目で見る音を聞いて、手で覚えて、まさに身体で覚えるしかありません。」

「アッシ図になると、次にどこを叩くと鉄板のどこにシワが寄るか、瞬時に予測できる。完成した部品を見ればそれが誰の仕事

かわかるそう。技術が身に

ついていくプロフェスを、青木さんは野球に例えて説明してくれた。「口の取り方でもバットのスイングでも、まずは基本を何度も何度も反復練習するでしょ。すると、やがて何も考えなくても身体が自然と動くようになります。そうしたら、もう基本にとら

われる必要はない。基本から離れて、自分の個性を出せばいいんです。板金も同じ。一通りできるのに4年、基本から離れられるまでには12〜13年、そこから先はどれだけ個性を出せるかですね。」

野球と違うのは、選手寿命の長さ。青木さんは板金には終わりが無いと言った。

「試作車の1台目より2台目、その次はもっといいものをと、ずっと挑戦してきました。でも、まだ

まだ、ときどき板の気持ちが悪、  
どうもわからなくなるんです。

富士重工業株式会社 群馬製作所  
一級板金技能士  
青木 佑 さん

文 篠塚 義成  
text: Yoshinari Shinozuka

写真 林 泉  
photo: Izumi Hayashi